

サビエル生誕五百年



巡礼の道

167

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

アンコール遺跡の疑問

アンコール・ワットやアンコール・トムなどからなるアンコール遺跡群はカンボジア唯一の世界遺産である。

一九七二年に開かれたユネスコ総会で、人

類の文化や、地球の自然を「大切な宝物」として世界遺産条約によって「世界遺産」に登録するようになった。

二〇〇七年、新規に

登録が認められた二十

二件を加えて総数は八百五十一件。ところが現在では総数八百九十件で、わずか一年余で四十件近く増えた計算になる。

登録されると注目されて観光客が殺到するため各国の要請が強いのであるが、いささか乱発気味ではないかと思いたくなる。

そんな中でアンコール遺跡群はアジアの至宝であり、まさに世界遺産である。

クメール民族のアンコール王朝は九世紀から十五世紀半ばまで続き、インドシナ半島の大半を支配し、二十六人の王を輩出した。

その代表的な建築がアンコール・ワットであり、アンコール・トムである。私見だが、これは二つの世界遺産として登録されるべき

クメール建築の最高傑作、

アンコール・ワット



2009.07.22

ではないかと思う。

アンコール・ワットは一一一三年に国を統一した十八代のスールヤバルマン二世によって建てられたヒンズー教寺院。

中央に五つの尖塔、

周囲の三重の回廊からなる巨大な石造りの寺院はクメール建築の最高傑作といわれる。一方、アンコール・トムは二十一代の王、

ジャヤバルマン七世によって建築された都城で、総面積九平方キロ。その中央に仏教寺院バイヨンがある。

「バイヨンの微笑」と賛えられる石仏顔は百七十三あり、高いものは四十以上の尖塔の上部四面に彫られている。ヒンズー教と仏教、

建物と石仏、さらにアンコール朝は血縁で継承されたのではなく、実力で王位を奪取したことなどを考えると、二つの別の世界遺産にすべきだろう。観光資源としてもその方がメリットがある。

しかし、戦争と内乱が続いたカンボジアでこれほどの建築群が世界遺産に登録されたのも制度スタートから二十年もあとのことだ。文化や自然に目を向けるゆとりもなかったか

らであろう。それにしてもこれほどの文化を持ったクメール民族の国が今、アジアで最も貧しい国になったのはなぜだろうか。

またクメールの石の

文化が人類の歴史から消え、一八六〇年、フランスの植物学者アンリ・ムオが発見するまで忘れられていたのはなぜだろうか。
(元山口放送取締役ラジオ局長)



アンコール・トムの中心のバイヨン